

ソヴィエトにおける変形文法の受容と変容

—不定詞つき対格の比較—

岡 部 匠 一

0. 定位と展望. 変形文法といわれる言語理論は、英語を標的言語として開発され、Harris [1957. 'Co-occurrence and Transformation in Linguistic Structure', *Language* 33: 284-340] を先駆とし、これを克服変容する形になった Chomsky [1957. *Syntactic structures*] に始まるとされている。しかし、言語研究の方法、および、自然言語の mechanism を解明するための model としての言語理論は、Chomskian School といわれるアメリカ変形学派に限るものではない。

Lyons [1968. *Theoretical Linguistics*] によれば、Hockett, Harris に続いて Шаумян によって、“第3の方法”が提案されているといわれている。筆者は、この第3の方法といわれる変形分析の Шаумян の〈写像理論〉を、英露に共通してみられる、いわゆる伝統文法でいう accusative with infinitive と英語で言われ、またロシア語では、〈目的語不定詞〉といわれている構造の具体的分析を通じて、いわゆる Chomsky 的〈変形分析〉と Шаумян 的〈写像モデル〉の異同、および、その相互の影響として表われる異種交配の現象なども明らかにしてゆきたい。

0.1. 〈変形分析〉と〈写像理論〉の研究史. まずライアンズによると、「ハリスとチャムスキーは密接に協力して仕事をしてきたけれども、彼らは、始めから違った線に沿って変形文法の理論を発展させてきた。ごく最近、ソヴィエトの言語学者の Шаумян は一冊の本を出したが、この本の中では、“変形”の規則を使った第3の文法分析が提案されている。」

(Although Harris and Chomsky were working in close association (and their publications each has acknowledged his debt to the other). they have from the outset developed the theory of transformational grammar along different lines. More recently the Soviet linguist Schaumjan, has published a book (1965) in which yet a third system of grammatical analysis has been proposed making use of transformational rules.)

Шаумян の写像理論のまえに、Chomskian School を概観すると、1957年に Chomsky の *Syntactic Structures* [邦訳『文法の構造』1960]、このあと、約10年の間隔をおいて、1965年に同じ著者の *Aspects of The Theory of Syntax* [『文法理論の諸相』1970] が出されている。この *Aspects* 以後のいわゆる *post-Aspects* 期前後に Transformational grammar の textbook としては Emmon Bach (1964. *Introduction to Transformational Grammars* [『変形文法』1969]) と; Andreas Koutsoudas, (1967. *Writing Transformational Grammars*) の2冊があげられよう。もちろん *post-Aspects* の前後には、数多くの特殊論文が積みあげられていることは、*Language, word, International Journal of American Linguistics* のページを繰るまでもなく、変形文法に関する二つの書誌目録に徴しても明らかで

ある。

0.2. 次に, Soviet Union における Chomsky の *Syntactic structures* の紹介を含む Soviet assimilation of American generative grammar と Шаумян の applicational model (写像モデル) の発展を考えてみよう。ソ連邦で Chomsky の『文法の構造』が紹介されたのは, Новое в лингвистике 第2巻に載った Бабитский の部分的な翻訳であろう。もちろん, これより一年前に, リーズの「Что такое трансформации」(Вопросы языкознания 1961 Vol. 3) があるが, これは *The Grammar of English Nominalization* (1960) の著者であるアメリカ国籍のリーズが書いたものであるから, これは, ソヴィエト側の〈アメリカ変形分析の受容〉とはいえない。この論文は, 要するに, アメリカの言語学者がソヴィエトの専門誌に執筆したもので, むしろ, infiltration of American transformational grammar into Soviet Linguistics. (アメリカ変形文法の, ソヴィエト言語学への侵透) の一例といえよう。これは, リーズが, 人文科学ではなく, 化学の専門家であり, 自然科学の研究のために, ロシア語を早く学んでいたためでもあろう。それゆえ, 一般には, ロシア語ができないといわれているアメリカの学者の中でリーズは, 自然科学の back ground と research physical chemist の5年にわたる career をもつ異色の言語学者といえよう。

0.4. それゆえ一般的には, Chomsky に始まる American transformationalist school の変形分析は, ソヴィエトの学者によって, そのままの形で行われることは少なく, むしろ, アメリカのロシア語の研究者によるロシア語への変形分析の適用という形で研究が行われているというのが筆者の印象である。たとえば, 厳密な変形分析の方法によるとはいいがたいが, Morris Halle の, *The Sound pattern of Russian* 1959. (『ロシア語の音型』や, Dean worth のかなり早い時期の論文, 'Transfonm Analysis of Russian Instrumental Constructions', *Word* 14. 247-90 (1958), さらに, 最近のものでは, 音韻面では, 同じく Halle の *The accentuation of Russian Words*, *Lg.* (1973) 49: 312-348., (『ロシア語のアクセント』), 統語論では, Leonard H. Babby, 'The deep Structure of Adjectives and Participles in Russian', *Lg.* (1973) 49: 349-360. (『ロシア語の形容詞と分詞の深層構造』) などがあげられよう。

0.3. それでは, Шаумян 自身が, 『言語研究の諸問題』の1965年, 第5巻で, 言っているような, Z. Harris や N. Chomsky の変形文法概念とは根本的に違っている, 写像生成モデルにおける変形の考え方は, いつごろ胚胎し, また, どのような論文が積重ねられてきたかを, やや詳しく探ってみよう。

Chomsky の *Syntactic Structures* の発表が, 1957年であることはすでに述べた。そして, この Шаумян の, 根本的に異なる model の発表は1963年に вопросы языкознания Vol. 2 に Соволева と共同で発表された, Порождающая лингвистическая модель на базе принципа двухступенчатости. (『二重性の原理に基いた変形言語モデル』) であろう。すなわち, 著者たち自身のことばによれば, 'the model suggested features a single generative process based on a universal operation, termed application, which makes it possible to dispense with transformations. Therefore in the applicational model transformations are no longer a means of generating phrases, but a means of establishing invariance relations between phrases obtained by application. Owing to the interaction of two matrices — the matrix of class generation and the matrix of application — it become possible

within the frame work of the applicational generative model to obtain transformations automatically as a result of definite calculus rules, while in *all previously suggested models transformations are set down as an arbitrary list*'. (italics mine) (提案されたモデルは、写像と呼ばれる一般的な演算をその特徴とする。この演算は、変形をなしで済ますことを可能にする。それゆえ、写像モデルでは、変形は、もはや句を生成する手段ではなく、写像によって得られた句の間の不変の関係を確立する手段である。二つの行列——類生成行列と写像の行列の二つの行列の相互作用によって、写像生成モデルの枠内で、一定の計算規則の結果として、自動的に変形を得ることが可能になる。一方、すべてのこれまでに提案されたモデルでは、変形は、恣意的なリストとして書き下ろされている。)(下線部筆者) この変形が、恣意的なリストとして書きおろされているという批判は、Шаумян と Соболева による最近の論文でも、次のような表現で一貫してくり返されている。

「写像モデルでは、変形は変形のための基本的要素として考察されるので、変形文法の主な労作にみられる原子論的研究法、(атомистический подход=atomical approach) を克服することが可能になった。この原子論的研究法では、変形体は目録 (список=list) として与えられている。写像モデルでは、我々は、切り離された変形体の目録ではなくて、変形場の内部における変形体の演算が問題になる。(С. К. Шаумян, П. А. Соболева 'Семантическое исчисление в аппликативной модели', Теоретические и экспериментальные исследования в области структурной и прикладной лингвистики. 1973, p. 239.)

0.4. 次に Шаумян のいう写像モデルと Chomsky のいう変形分析の相違を、主として理論的な視点から見よう。Аперсян によれば、写像理論は、本質的に上に考察された(すなわち、Chomsky の変形分析)変形文法のモデルとは、二つの点で異っている。すなわち、その論理構造と、その中に形式化された言語学の考え方の二点においてである。

[Аперсян, Идеи и методы современной структурной лингвистики (『現代構造言語学の理念と方法』) 1966, p. 223.]

Аперсян の説いていることをまとめると、写像理論の論理構造の独自性は、変形過程が、このモデルの中では、二つの本質的に異なる層で行われるものと考えられる。この2層は construction の層と observation の層である。変形の過程は、理想的な対象物、語や文の構成されたアナログをまず第一段階で求め、変形の第2段階で、ある一定の解釈の規則の助けを借りて、このアナログを、ある自然言語の現実の語や文に変えてゆく、(loc, cit.)。また、アメリカの変形分析では、操作の対象は strings (連鎖) か、phrase-marker (句構造標識) の樹 (tree) であり、それらの strings や trees が新しい連鎖や樹に変えられてゆく。しかし、写像生成モデルのばあいには、二種類の言語対象物が考えられる。語類 (class of words) と語複合体 (complex of words) である。そして、この二種類の言語対象物に応じて、写像変形理論の中には、お互いに関連はしているが、二つの異なる生成のメカニズムが規定される。一つは、語群の生成の機構であり、今一つは語複合体の生成機構である。語群の生成機構は、言語の語形変化を軸としての要素間の関係をモデル化し、語複合体の生成機構は、統語関係を軸として要素間の関係をモデル化する。

Шаумян の写像生成モデルは、アメリカの変形文法のモデル、および直接構成素のモデルとは、さらに、いま一つの関係において異っている。Шаумян のモデルには、二つの異

った演算が用いられている。一つは、このモデルの名称を与えられた写像であり、もう一つは変形である。写像は、言語対象物変換の唯一の規則であり、変形は、言語対象物の不変の変換の唯一の規則である。

0.5. 写像モデルの詳細は、英語の *accusative with infinitive* と、ロシア語の〈目的語不定詞構文〉の対比研究の際に、具体例に即して述べることにして、まず Шаумян, Соболева の共同で、あるいは、Шаумян 一人の筆になる、写像生成モデルの論考、および著書を発表年代を追って書誌的に枚挙しておこう。

Шаумян 自身が述べているように、'1961年には、写像モデルと名付けられる、新しい生成文法モデルが、生成過程の二層性の原則に基いて提案された'。(Шаумян & Соболева, 'семантическое исчисление в аппликативной модели,' (1973, p. 232. 「写像モデルにおける意味計算」) それゆえ、Шаумян の写像理論は、その初期より、Chomsky の変形分析の影響を受けないで独自の道を歩んだと考えられる。まず初めに1960年の Шаумян 論文から編年型式で Шаумян と Соболева の論文を挙げる。

1. Шаумян (1960), 'Структурные методы изучения значения, Тезисы докладов на пленарном заседании словарной Комиссии [ОЛЯ АН СССР] посвященном современной проблематике лексикологии и семасиологии. Москва 1960. [「意味研究の構造的な方法」『語彙論の現代の問題の第6回全体集会の報告論叢』(科学アカデミー言語文学部門)。

2. Шаумян, С. К., 'Теоретические основы трансформационной грамматики', Новое в лингвистике. Vol. 2 1962 [「変形文法の理論的基礎」『言語学新論集』]

3. — Проблемы теоретической фонологии. Москва, 1962 [「理論音韻論の諸問題』] — 'Насущные задачи структурной лингвистики', Известия академии наук СССР. Отделение литературы и языка. Vol. XXI, Nr. 2, 1962 [「構造言語学の重要な問題』『ソヴィエトアカデミー言語, 文学部門通報』]

4. — 'преобразование информации в процессе познания и двухступенчатая теория структурной лингвистики', Проблемы структурной лингвистики. ИЗД. АН. СССР. М. 1962. 1-12с. [「認識過程における情報の変換と構造言語学の二段階理論』『構造言語学の諸問題』(Шаумян編, ソヴィエトアカデミー)』]

5. — Панхроническая система дифференциальных элементов и двухступенчатая теория фонологии. Шаумян От. ред., Проблемы структурной лингвистики. Академии Наук СССР. М. 1962. 224 S. [「弁別的要素の共時体系と音韻論の2段階理論』Шаумян責任編集, 『構造言語学の諸問題』]

6. Шаумян, С. К., & Соболева, П. А., Аппликативная порождающая модель и исчисление трансформации в русском языке. М. АН, СССР, 1963, 125 с. [「写像生成モデルとロシア語における変形』科学アカデミー]

7. Шаумян, О логическом базисе лингвистической теории, проблемы структурной лингвистики. 1963. М., 281.с. АН. СССР и РЯ [「言語理論の論理的基礎』『構造言語学の諸問題』(ソヴィエト科学アカデミー, ロシア語部)]

8. Шаумян, Порождающая лингвистическая модель, на базе принципа двухступенчатости, Вопросы языкознания, (1963) 2: 57-71. [「二段階性の原理に基づく生成言語モデル』『言語研究の諸問題』]

9. Шаумян, С. К., & Соболева, П. А., 'аппликативная порождающая модель, и автоматическое получение семантических классов и подклассов.' Проблемы формализации семантики языков. М. 1964, 180 с. [写像モデルと、意味群、意味下位群の自動的認知] 『言語の意味の形式化の諸問題』

10. Шаумян, С. К., 'Трансформационная грамматика и аппликативная порождающая модель'

11. Шаумян. С. К., Структурная лингвистика. М. 1965, 396 с. (наука) (АН СССР. ИРЯ) [『構造言語学』モスクワ, 1965, 396с. 《ナウカ社》(科学アカデミー, ロシア語研究所)]

12. — 'Теория трансформации,' Вопросы языкознания 1965. С. 64-73 [『変形理論』『言語研究の諸問題』]

13. — Теоретические проблемы прикладной лингвистики М. 1965. 138 с. МГУ. филол. фак-т. публикации отделения структурной и прикладной лингвистике, вып. 1) [『意味の体系としての言語』『応用言語学の理論的諸問題』第1巻 М. 1965 (138 pp) p. 47-55]

14. Шаумян, С. К., & Соболева, П. А., 'аппликативная порождающая модель и формализация грамматической синонимии,' Вопросы языкознания 1965. Nr. 5, с. 31-50. [『写像生成モデルと文法シノニムの形成』『言語研究の諸問題』]

15. — Шаумян. 'Outline of the applicational generative model for the description of language.' *Foundations of language* Vol. 1. No. 3. 1965.

16. Шаумян С. К., & Соболева, П. А., 'Transformational Calculus as a Tool of Semantic Study of Natural Languages.' *Foundations of languages*. Vol. 1. No. 4. 1965

17. Шаумян. 'Теория порождающих грамматик и проблема понимания', Семинар по психолингвистике (30-тая-1 Юния 1966) Тезисы доклад. и сообщ. М. 1966. 78 с. (АН СССР ИЯЗ) [『変形文法の理論と理解の問題』『報告と講演』78pp. (p. 14-16) (ソヴィエト科学アカデミー, 言語学研究所)]

18. — 'Современное состояние двухступенчатой теории фонологии.' с. 3-23, Исследования по фонологии. отв. ред., С. К. Шаумян, М. (Наука), 1966. 408 с. (АН СССР ИРЯ. [『2段階音韻論の現状』『音韻論研究』1966 408 pp.]

19. — 'Теория порождающих грамматик и проблема понимания', с. 349-350 Тезисы сообщения, проблемы общей психологии. М., 1966. [『生成文法理論と理解の問題』『論集2, 一般心理学の問題』 М. 1966.

20. — 'Принцип гетероинвариантности в двухступенчатой теории фонологии', с. 3-6. Исследования по фонологии. отв. ред. Шаумян М. (Наука) 1966. 408 с. (АН СССР. ИРЯ) с. 3-6. [『2段階音韻論の異種変性の原理』『音韻論研究』, 責任編集ンヤウミヤン, 408 pp. (ソヴィエト科学アカデミー, 言語・文学部) pp. 3-6.

21. — 'Кибернетика и язык', С. 3-21. Статистичен та структурен, лингвистичен модел, киев, 1966. 163 С. [『サイバネティクスと言語』『計量・構造言語学モデル』キエフ, 1966. (161с) с. 3-21.]

22. — ‘Порождающая грамматика как теория лингвистических универсалии,’ с. 78–82. Проблемы языкознания доклады и сообщения советских ученых на X международном конгрессе лингвистов. (Buxarest. 28/VIII–2/IX 1967). [отв. ред. Ф. П., Филин] М. 《Наука》 1967, 285 с. [「言語の普遍性の理論としての変形文法」『言語学の諸問題』 1967, p. 78–82.]

23. — ‘Правила Корреспонденции в оппикативной порождающей модель,’ с. 168–173. Уровни языка и их взаимодействие. Тезисы научной Конференции (4–7. ОНР. 1967) М. 1967. 182с. [「写像変形モデルにおける対応の規則」『言語の層とその相互作用, 学会報告』 1967. (182 pp.) p. 168–173]

24. — ‘Двухступенчатая порождающих грамматик.’ с. 129–134. Межвузовская конференция по порождающим грамматикам. Тезисы доклады. 1967. [「生成文法の2階層理論」『変形文法に関する大学間会議報告』 (キャエリクロー, Sept. 15–25.) pp. 129–134.]

25. Шаумян *et. al.* ‘построение слова-образовательного словаря на основе аппликативной порождающей модель,’ с. 134–136. Межвузовская конференция по порождающим грамматиками. Тезисы докл. Тарты 1967. 144с. [「写像生成モデルによる語形成辞典の建設」『大学間会議報告』 1967 (144pp) p. 134–136.]

26. — ‘абстрактные деривативные ситемы; аппликативная порождающая модель,’ с. 130–201. отв. ред. С. К. Шаумян, Проблемы структурной лингвистики. 1967. 1968. М. 《Наука》. [「写像変形モデルの抽象的派生の体系」『構造言語学の諸問題 1967』 1968, (412pp.) pp. 136–201.]

27. — ‘Семиотика и теория порождающих гамматик,’ 5–7. отв. ред. С. К. Шаумян, Проблемы структурной лингвистики. 1967, М. 1968 (412pp) 5–7с. [「意味と生成文法理論」『構造言語学の諸問題 1967』 1968. (pp. 5–7.)

28. Шаумян С. К. & П. А. Соболева, ‘Семантическое исчисление в аппликативной модель’ с. 232–246. Звегинцев (ред.), Теоретические и экспериментальные исследования в области структурной прикладной и лингвистики. МГУ. 1973. 246pp. [「変形モデルにおける意味研究」『構造および応用言語学の分野における理論および実験研究』モスクワ大学, 1973.]

1.0. Шаумян の論考は、これ以外にも発表されていると思われるが、筆者が知りえた限りでは、以上の28点の著書、論文がある。これらの論考の内容の深化と変遷は、別の機会にゆずり、まず具体的問題、英語の *accusative with infinitive* と、ロシア語の目的語不定詞構造の比較を通して、Chomsky 的変形分析と、Шаумян の写像モデルの違いを考えてみよう。

1.1. まず次のロシア語の文の考察から始めよう。① Он просил его остаться. (He proposed him to say.) この文、およびそれと構造、および意味的に等価な英語の文では、主語の он (he) と *accusative* の ему (him) は、別の人間を外語世界 (*extralinguistic world*) で指す、と考える。Chomsky の変形分析のことばを借りれば、両者は *coreferencial* (同一指示的) であるといえよう。このロシア文は、いわゆる<目的語つき不定詞構造>と、伝統的なロシア文法で言われているものであり、類例としては、② Он просил его малчать. (He

asked him to be silent.) ③ Он просил нас прочитать рассказ еще раз. (He asked us to read the story once again.) のような文が挙げられよう。

まず、これらの文を Chomsky 変形分析では、どう考えるかを tree diagram で示そう。まず①の深層構造は次のように考えられる。

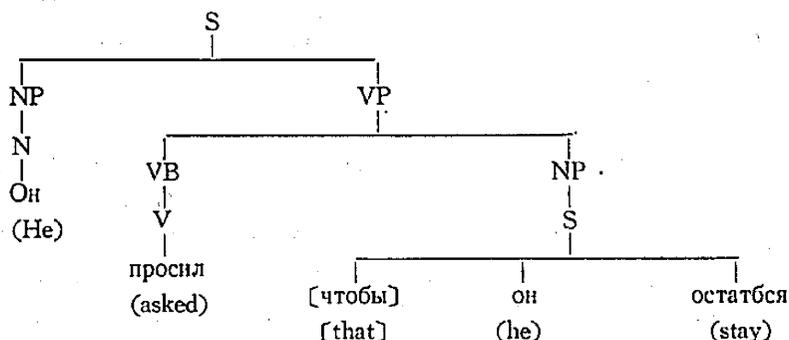


Fig. 1

この分析では、он остаться (he stay) が embedded sentence と考えられ、clause complementizer (節補文化子) чтобы (that) で Complementizer transformation によって、deep structure の中に持込まれる。すなわち、まず、第1段階で、чтобы он остаться がつくられる。第2段階では、equi noun deletion transformation が適用されて、coreferential な он (he) が除かれることになるが、このばあいは、coreferential な он ではないので、この同一名詞削除変形は受けない。第3段階では、clause の чтобы (that) が消去される transformation が適用されて、表層構造が生成される。細かな、Subject-verb agreement の transformation, case transformation, それらの ordering の問題などを考察外においても、Chomsky の変形理論の、この構文への適用の理解はさまたげない。それゆえ、ロシア語の①、②、③の〈不定詞付き目的語〉に対する Chomsky の変形分析の過程は、上記三段階の transformation, 補文化子による埋込み文の深層構造への持込みにより、「彼₁がくることを彼₂はたのんだ」との意味解釈を当該文に与え、同一名詞消去、補文化子消去、格の変形、主語動詞一致変形（でなく句構造での型態部の修正の形をとることもある）を経て、表層構造としての現実の文を得ることになる。

1.2. 次に、この Он просил ему отстаться. (he asked him to stay.) を Шаумян の写像理論では、どうなるかを考えてみよう。まず始めに、写像生成モデルの簡単な紹介を、この文へ導く最短距離を念頭におきながら試みよう。

まず、写像生成モデルには、基本語類 (ideal stem) が4項設定される。これらは、① N : дом (house), рыба (fish), окно (window) のような名詞類を表わす。② V : идти (go) とか, ехать, (ride) のような動詞類を表わす。③ A : белый (white), больной (sick) のような形容詞類を表わす。④ D : там (there), тогда (then), туда (there) のような副詞類を表わす。次にこれらの symbol から、写像規則 (application rule) によって、語複合体 (complex) がつくられるが、これは、第1表によって与えられる。

	N	V	A	D
N	O	—	—	O
V	VN	O	O	—
A	AN	O	O	—
D	O	DV	DA	O

第1表

	V	N	A	D
R ₁	R ₁ V	R ₁ N	R ₁ A	R ₁ D
R ₂	R ₂ V	R ₂ N	R ₂ A	R ₂ D
R ₃	R ₃ V	R ₃ N	R ₃ A	R ₃ D
R ₄	R ₄ V	R ₄ N	R ₄ A	R ₄ D

第2表

第1表から分ることは、VとAはNに写像でき、Dは、AとVに写像できるということである。また、枠の中のマイナスは、写像ができないということ、またOは、対応する対(ついで)には、写像は定義されていないことを示す。それゆえ、マイナス(—)の配列から分かるように、写像は方向性を持っていることである。たとえばAはNに写像されて、ANを生成するが、逆に、NがAに写像されてNAを生ずることはできない。また、ここで注意したいことは、X+Yの記号列は意味を持っていないことである。

ここで第1表で与えられる基本複合体に具体例を当てはめてみよう。まず、この表で生成される記号列は、N、V、A、Dと、この表により、どの規則でも、一回しか適用しないで作られるものは、N、V、AD、NV、VD、AN、DA、DAN、ANV、NVD、DANV、ANVD、DANVDの14の基本複合体である。これらは、語や語群、文の基本複合体と解することができる。たとえば、DANVDは、здесь установилась очень хорошая погода (Here set very fine weather.); AN: Большой дом (large house). ANV: Хмурый день брезжит. (Frowning day dawns.). NVD; Часы бьют полночь. (watch struck midnight.) 等である。

写像理論では、伝統文法でみられる支配、被支配の關係に似た、非反射、非対称、非推移の關係が規定されている。この關係を<写像的支配> (applicational domination) という。これ図で示すと、次のようになる。



すなわち、Nは、AとDを従え、VとDも従属させている。それゆえ、<写像的支配>では、文の中心は、(主語の働き)をしている名詞である。

一方、文の中心は動詞であるという考え方に立つ支配、被支配關係が写像理論には考えられている。これを、<構成的支配> (constititional domination) という。



それゆえ、NVを除けば、<写像支配>と<構成支配>は一致する。

次に、先にあげた基本要素が複合要素の中で占める位置を表わす device が写像 model には組込まれていることに注意しよう。ここで、写像 model では、関係子 (relator) を導入する。すなわち、R₁は動詞の特性を表わし、R₂は、名詞、R₃は形容詞、R₄は、副詞の特性を表わす。第2表に、この relator によって創出される記号群をあげた。説明を加えると、R₁Vは、動詞の位置におかれた動詞を、R₁Nは、動詞の位置におかれた名詞、(He was a

liberal. の文における *liberal.* を考えている) R_1A は、動詞の位置におかれた形容詞 (たとえば *bread was fresh and fragrant.* の形容詞群), R_1D は、動詞の位置におかれた副詞を考えている。

第2表の16コの記号列に, R_1, R_2, R_3, R_4 の基本関係子を適用すると, $R_2V=teach \rightarrow R_1R_2V=teacher$ のような具体的解釈を受ける64コの派生記号列が生ずる。これで, さきにあげたロシア語の目的語付き不定詞の構文を表記すると次のようになる。

Он	просил	его	остаться.
R_2N	R_1V	R_4	$(R_4R_2R_1X)$
(He	asked	him	to stay.)

これに説明を加えると, まず, он (he) просил (asked) は, それぞれ, 名詞, および動詞が, それぞれの基本的位置におかれているので relator R_2, R_1 と, 基本要素 N, V との結合がみられる。問題は, $R_4 (R_4R_2R_1X)$ の記号列が, его остаться に当てられている部分であろう。これは, остаться が, 動詞であるから, R_1X が relator R_1 によって生成され, R_2 でこの R_1X が「とどまること」と名詞化され, R_4 の relator で, この R_2R_1X の複合体が, 広い意味での補足語とされる。この全体を括弧の中にとりこんでそれ全部を R_4 としたのは, 「彼がとどまること」を, 主動詞 просил (proposed) に対し, 補足語化したと言えよう。

これをアメリカの変形分析との対比でいえば, まず, его остаться (he stay) を深層構造として, 動詞に注目して生成し, R_2 で, その意味解釈として名詞化 (nominalization) を行ない, R_4 で, его остаться の複合体を補足語化 (Complementize) し, parenthesis のまへの R_4 は, tree diagram の中での grammatical relation を表現する, というふうに解することができよう。

紙数の制約のため詳説できないが, <写像理論>の立場からするアメリカ変形文法への批判は変形部門 (transformational component) に含まれる<変形規則>に, 有機的なつながりがないということ, すなわち, 写像理論の側のことばを, 再度借りれば, 'list のまとまりのない集合体' である。ということである。これに答えて, transformation にある ordering とか cyclic principle などをもちだしても答えにはならない。たとえば, Langacker も言っているように, ['This is the attitude that linguistic theory and description are relatively short-term engineering tasks, that linguistic problems can be solved by tinkering with extant formalisms and hammering out more and more phrase-structures and transformational rules until the languages we are interested in are fully described. (writer's italics) *Review of Nicolas Ruwet's Introduction a la grammaire générative.*

'公式や記号連鎖をいじって, 句構造や, 変形規則を, 限りなくふやしていって, 研究対象の言語を explicitly に記述できる' という誤解 (正解!?) を解くためのなにかがなされなければならないという危惧をもつのは, Langacker や筆者ばかりではないであろう。

しかし, Шаумян の理論は, まだ骨組のみが目立ち, Chomsky への批判としては当たっている transformations are set down in an arbitrary list にしても, 具体的言語への適用は今後の課題であるし, さらに, 自分の理論は, '各々の特殊な自然言語に対する変形を予測する方法を与える' ['his theory provides a method for predicting the transformations of each specific language' (in Barbara Hall's *Review of* *Аппликативная порождающая*

модель и исчисление трансформацио в русском языке, *Lg.* 40 (1964), No. 3. 404]]
も、主張ばかりに終わっているといえよう。

—Oct. 31 '73—

Résumé

It is a commonplace to maintain that in a present status of linguistics Chomskian school of generative grammar offers a most promising and possibly most powerful model for linguistic description of natural language, specifically in its synchronic aspect. However one is reminded that there are some other approaches to the mastery of mechanism in language when Professor Lyons has it that 'a third system of grammatical analysis has been for some time proposed by the Soviet linguist Schaumjan in his *Strukturunaja lingvostika* of transformational persuasion.

This paper is an attempt at contrastive study of Schaumjan's applicational model *vs.* Chomskian transformational model in applying both models to a concrete construction of structural significance of the so-called 'accusative with infinitive' in English and 'objective infinitive' in Russian.

First brief historical survey of transformational studies of Chomskian school are chronologically given with special reference to pre-and post-*Aspects* tendencies of American transformationalists. Then Schaumjan's theory and practice of applicational grammar are described in some detail because no full account of his transformational study has to my knowledge been known to American and, for that matter, to Japanese linguists of Chomskian persuasion.

Schaumjan's works on applicational generative model are given in a bibliographical form to the benefits of the scholars who are willing to follow this applicational generative model on his own.

Issue has taken with above-mentioned controlled sample construction, 'On poplosil ego otstat'sja' (He asked him to stay.) and this equivalent construction in both language was first analysed on the framework of Chomskian generative approach, and secondly on that of Schaumjan's applicational model.

A tentative assessment of the theory and practice of both transformational studies is given : Chomskian transformational discipline appears arbitrary and atomistic to the eyes of the Soviet counterpart, and there seems to be a good reason to believe to the detriment of linguists of Chomskian persuasion that linguistic problems on their hands can be solved by 'tinkering with extant formalism and hammering out more and more phrase-structures and transformational rules until the languages we are interested in are fully described'.

On the other hand Schaumjan's applicational generative model, though well founded on its formal theoretical background, seems to be quite reluctant to tackle with concrete problems, and its seemingly rigorous array of apparatus need further exploitation in the face of natural languages which await not for abstract theorizing but for concrete analysis and description.